

育児ネットワークをめぐる「ケータイ」の活用

高 橋 円

はじめに

本論文の目的は、育児ネットワークの構築とケータイ¹⁾の活用に関連について追究することである。筆者は、甲南女子大学大学院に提出した学位論文「主婦の子育て支援ネットワークに関する社会学的研究²⁾」において、残された課題として、母親たちのネットワークの構築や拡大の手段である携帯電話の活用について深い考察が必要であることを指摘しておいた。本論文は、その課題に応える試みのひとつである。

先行研究に学びながら、ケータイの利用が育児期にある女性のパーソナル・ネットワークに与える影響について、インタビュー調査から分析をおこなう。

第1章 母親たちの育児ネットワーク

本章では、育児の実態と、母親たちの育児ネットワークの構築およびその特徴について、幼稚園児の母親へのアンケート調査³⁾とインタビュー調査⁴⁾をもとにまとめる。

家庭内における育児は専ら母親に任されており、父親は日常的には参加していない⁵⁾。というのも、父親と子どもの生活時間の違いは甚だしく、父親が平日に子どもの世話をすることは不可能だからである。

また、核家族世帯が多いため⁶⁾、祖父母が日常的に孫の世話をすることはほとんどない⁷⁾。母方の祖父母(特に祖母)が母親の代わりに孫の面倒をみることはあるが、互いの日程を合わせるなど、事前の準備を整えてからおこなわれる。なぜなら、祖父母とはいえ、まだ50代後半から60代前半で、彼らにも仕事や生活があるからである。困っているときは手伝うが、それ以外の場面では積極的にかかわろうとしないのである。

育児のなかでも家事と連動している作業は、母親だけでおこなわれている。家族以外の人たちが子どもにかかわることもない。

これだけを見ると、あたかも母親と子どもとが孤立しているかのようにおもえる。しかし、相談や情報など、母親を間接的に援助する人的資源については、家族以外の存在が際立ってくる。

育児についての悩みを相談する⁸⁾のは、アンケート調査の結果では父親が最も多く、母方の祖母と続いていた。しかし、父親については、子どもについての情報を共有するという意味合いが強かった。言葉どおりに、悩みを相談しているのは、母方の祖母である。実母であるので話しやすく、経験者であるので具体的な解決策を聞くことができる。

育児の情報を提供してくれる⁹⁾のは、子どもを通じて知り合った友人、いわゆる、子育て仲間である。子どもが生まれたばかりの頃は、母方の祖母を頼ることが多い。ところが子どもの成長とともに、母親たちは、祖父母世代の意見や情報にギャップを感じはじめる。それよりも、同じ地域で子どもを育てている人や同じ幼稚園の保護者からの、地域限定型の情報を頼るようになるのである。

幼い子どもを育てている専業主婦の生活は、子どもを中心に回っている。彼女たちが日常的につきあう相手も、子どもをきっかけにして出会った人たちが多い¹⁰⁾。同じ地域に暮らしていても、同じような歳の子どもの育てていない人とのつきあいはあまりない。育児経験のない人たちへの不信感は強く、幼稚園の実習生やクラス担任への信用は薄い¹¹⁾。

現在、彼女たちが特に強く結びついているのは、幼稚園の保護者である。彼女たちのネットワークは、子どもの交友関係に合わせて広がる。親同士の相性よりも、子ども同士の関係が優先されるため、母親たちは我慢を強いられることもある。独身時代の狭く深いネットワークとは大きく異なり、子どもを中心にした子育てネットワークは広く浅い。

子どもを中心に行っているため、子どもの所属するグループが変わると、親たちのネットワークもそちらへ移る。産院、子育てサークルなど参加期間が短いグループとのつきあいは短く、幼稚園のように参加期間が

比較的長く、子どもの行事や父母会など親同士のつきあいが頻繁なグループではつきあいが長くなる。子どもにも直接関わるほどの親密性はみられないが、子どもを育てる上で必要な情報を得るためには十分な関係といえる。

このような母親たちの広く浅い「情報交換のネットワーク」を支えているもののひとつが、ケータイである。

第2章 ケータイに関する先行研究

ケータイはこの十数年で著しく普及した。社会のあらゆる場面に登場し、人間関係の構築や継続にも影響を与えている。このことは育児の現場においてもいえるのではないだろうか。携帯電話についての先行研究を、本章では3つの視点から検討する。

第1点は、携帯電話の利用とパーソナル・ネットワークについて論じた松田美佐の「ケータイ利用から見えるジェンダー」(2001, 2002)である。松田はアンケート調査¹⁾の分析から、携帯電話の利用について、ライフステージによって差異がみられることを指摘している。

携帯電話の登場によって、人間関係に良くない影響(たとえば、直接対面しないコミュニケーションが先行し、人間関係が希薄になったなど)が出たように言われることがある。しかし、松田は携帯電話の登場によって人間関係が変化したのではなく、変化の原因は使い方にあると主張している。そして、携帯電話の利用の違いを性別や婚姻状況の軸に沿って分析し、3つに分類している。

1つめは、「パーソナルフォン」である。独身層にとってのケータイを「パーソナルフォン(個人専用電話)」と名づけている。その特徴は、自ら持つことを決定し、ケータイで連絡をとる相手が多いものの、電話をとる相手を選び、長電話の経験が多い、などである。2つめは、「モバイルフォン」である。既婚者にとってのケータイを「モバイルフォン(移動電話)」と名づけている。その特徴は、独身者よりケータイで連絡をとる相手は少なく、事前に選んだ相手とのみ、固定電話の使えない状況で利用している点である。3つめは、「プライベートフォン(私的電話)」である。既婚者の中でも女性にとっての携帯電話を「プライベートフォン」と名づけている。仕事関係以外の友人・知人や家族との連絡にケータイを利用し、「モバイルフォン」よりも、私的なネットワークが利用の中心で

ある。

ケータイの利用が社会構造上の変化に規定されていることや、ケータイの利用を分析することで、各層のパーソナル・ネットワークにも違いがあることを証明している。

第2点は、携帯電話のメールのやりとりと親しさの構築について論じた、是永論の「携帯メール『親しさ』にかかわるメディア」(2006)である。是永は大学生の携帯メールのやりとりから、「親しさ」を所与のものとして携帯電話が利用されているのではなく、携帯電話のコミュニケーションに関わる参加者の具体的なふるまいと手続きによって「親しさ」が達成されていく過程を分析している。

コミュニケーションの手段として、通話機能ではなくメール機能を選ぶことが、相手の状況を尊重したものとして位置づけられている。連絡をする相手や自分の状況と、その状況における相手と自分の関係について配慮している行為が、「親しさ」を築く一因となっている。

相手との関係性の維持は、連絡をとる頻度や接触する時間の増減ではなく、むしろそれらがやりとりのなかでどのように意味づけられ、互いの関係性を参照し、それを維持するものとして利用されているのかが、重要であると述べている。

第3点は、家族と携帯電話について考察した、奥野卓司の『第三の社会』(2000)である。この中で奥野は、家庭に外から情報を伝えるメディアとして、電話を取り上げている。黒電話に代表されるような一家に一台だった電話を「家族共有のメディア」という意味で「家メディア」と、コードレスフォンや携帯電話などを「個人専有のメディア」という意味で「個メディア」と定義している。そして、既婚女性へのインタビュー調査をもとに「個メディア」としての携帯電話の機能について分析している。

家族が個別に携帯電話を持つことは、「家族同士が離れていても連絡がとりあえるという意味で、その紐帯を強化している側面があるが、その一方で、自分の居場所を相手に特定されず、家族の役割から逸脱して個人としてふるまえるため、結果として家族を拡散させる側面もあわせもっている」とも指摘している。

そして、これまで家庭という場や家族という人間関係に強く束縛されてきた主婦には、後者の傾向がより強く表れているという。

しかしながら、主婦が携帯電話を持つ理由は、子どもや老親との緊急連絡のためであることから、女性が

家庭の外に出る機会が増えたという事実の反映とともに、未だに女性、特に主婦が家庭や家族からは完全に自由になりきれないことも指摘している。

以上の先行研究から、携帯電話の利用が社会構造上の位置の変化の影響を受けていること。メディアの選択ややりとりの中身によって親密さなどの関係性が決定すること。携帯電話の登場で家庭内の個人化が進んでいること、などが指摘できる。

ケータイが一般に広まってから、はや十数年が経った。ここで取りあげた先行研究の調査対象者は、新しいメディアを受けいれやすい若者や就労者、あるいは育児や介護を契機にケータイを持ち始めた既婚女性に限られている。

そこで筆者は、独身時代からケータイを使い、現在は乳幼児を育てている主婦を調査対象にして分析を進める。ライフステージの移行の過渡期ともいえる彼女たちがどのようにケータイを使い、どのようなネットワークを構築しているのか。以上の2点について次章で考察する。

第3章 メディアの選択と ネットワークづくり

育児期、特に乳幼児を育てている女性に限っていえば、彼女たちは学生時代からケータイを持っており、使いこなしてきた世代である。筆者がインタビューで出会った母親たちも、自分のケータイを持ち、日常的に使っている。表1は、彼女たちのケータイの利用についてあらわしている。

20代の3人(A, B, D)がケータイを持ち始めたの

は、学生時代である。30代後半のCだけが、家族旅行の際にテーマパーク内で別行動ができるように、最近になってケータイを持ち始めた。

ケータイのアドレス帳には、夫や双方の実家など日頃からつきあいのある親族や、幼稚園の保護者や子育てサークル・子どもの習い事など子どもを通じて知り合った人、近所の人などに加えて、学生時代からの友人の連絡先が登録されている。家族割引を利用するために携帯電話会社を変更したため、電話番号が変わったケースもあるが、その際には、学生時代からの友人の連絡先を再登録している。

一方、アドレス帳に登録している人たちが、連絡先を教えている人たちと一致している訳ではない。Cは夫方の親族には、ケータイ番号を知らせていない。「姑からの連絡は、家の固定電話にかかってくるので事足りている」という。

それでは、いったい、彼女たちはケータイをどのような場面で利用しているのだろうか。ここからはインタビュー調査での母親たちの語りを用いて、メディアとしての特性とネットワークづくりの2つの側面から考察する。

(1) メディアの選択

①ケータイを使う理由

4人のアドレス帳に登録されている人たちに共通するのは、夫や親族など家族とともに、近所の人や幼稚園の保護者など、子どもを通じて知り合った母親たち(子育て仲間)である。彼女たちが子育て仲間と連絡をする際に、なぜケータイを使うのか。その理由はDの語りから知ることができる。

表1 ケータイの利用について

	A (26)	B (28)	C (38)	D (29)
家族構成 (同居家族)	夫(26), 長男(4) 次男(7ヵ月)	夫(38), 長男(5) 長女(3)	夫(39), 長男(7) 次男(4)	夫(28), 長女(6) 次女(3)
持ち始めた時期	学生時代	学生時代	2005年	学生時代
番号の変更	なし	あり	なし	あり
メモリーの登録者 (個人)	夫, 双方の実家, その他の親族, 近所の人, 学生時代からの友人	夫, 双方の実家, その他の親族, 学生時代からの友人, 幼稚園の保護者, 子育てサークル	夫, 双方の実家, その他の親族, 幼稚園の保護者, 子どもの習い事関係	夫, 双方の実家, その他の親族, 学生時代からの友人, 幼稚園の保護者, 子どもの習い事関連
携帯電話の番号を 知らせている人	家族, 双方の実家, 近所の人, 学生時代の友人	家族, 双方の実家, 学生時代の友人, 幼稚園の保護者, 子育てサークル	家族, 妻方の実家, 妻方の親戚, 幼稚園の保護者, 子どもの習い事関連	家族, 双方の実家, その他の親族, 学生時代からの友人, 幼稚園の保護者, 子どもの習い事関連

【1-1】結構みんな(外に)出てることが多いから、つかまらへんねんね。それに(家の固定電話にかけるのは)気使うねん。同居の方が結構多くて。直接メールの方が早いし。(D)

母親たちの連絡先としてケータイが選ばれる要因のひとつは、用件を伝えたい相手に直接つながることである。自宅の固定電話を使うときに生まれる、「他の家族が出るかもしれない」という緊張感や気兼ねは、ケータイを使うことでなくなる。

【1-2】幼稚園もやけど、小学校。名簿がもらえないし。(D)

また、個人情報保護の観点から、幼稚園や学校では電話番号が記載された名簿が配られないことが多い。そのため、母親たちは、互いのケータイの番号やメールアドレスを交換して、日常のやりとりや緊急時に備えている。このような、外出時を含めて、事前に選んだ相手に対応するための機能は、松田が指摘した「モバイルフォン」にあてはまる。

②通話よりもメール機能

自宅の固定電話よりも相手に用件を伝えやすく、気兼ねすることなくコミュニケーションをとれるようにしているのが、ケータイのメール機能である。

【1-3】この宿題どうやったん?とか、そういうのもメールで聞いたりとか。明日の持ち物なに?とか。(D)

【1-3】のような用件は、緊急性や重要性に欠けている内容と捉えることもできるだろう。わざわざ電話するほどでもないやりとりにメールが使われている。

また、複数の相手に情報を伝える場合にも、メール機能が登場する。CやDは幼稚園で父母の会の役員をしている。以前は父母の会の連絡は電話で伝えられていたが、最近ではメールの一斉送信の機能が使われている。連絡網で回すより時間が短縮し、また途中で内容が変わることの恐れもなく、2人とも便利だと感じている。

乳児を育てる母親の携帯電話に関する調査(2005)¹³⁾によると、100人の母親のうち、98人が携帯電話を普段から利用している。

多機能化が進むケータイではあるが、「どんな機能を使っていますか(複数回答)」という質問には、メール機能が98.0%と最も多く、カメラ機能76.5%、通話機能67.3%と続いた。携帯サイトを見るのは40.8%であった。

メールの利用頻度は、1日に5件以下が56.3%と最も多く、1日に6から10件が27.1%である。メールの相手は、ママ友だち63.5%をはじめ、夫58.3

%、友人57.3%、自分の親29.9%と続く。出産後に携帯電話の利用形態が変わっており、31.1%の母親に通話機能の利用の減少が、30.6%の母親にメールの利用の増加が見られる。

通話機能よりもメールが使われる大きな理由は、相手の都合を気にすることなく、自分の用件を伝えられる点であろう。互いの生活を邪魔することなく連絡がとれる手段として、メールが使われている。

メール機能はパソコンでも利用できる。筆者は自宅のパソコンを利用したメールについて聞いたが、「子どもが眠った後に使うこともあるが、起きている間はじゃれてきて(キーボードを)打ってられない。」という意見を4人とも持っていた。

主婦のケータイとパソコンの利用に関する調査¹⁴⁾によると、メールを使うときに「自分のケータイ」57.9%に対して、「自宅のパソコン」を使うのは29.2%、「両方とも半分半分くらい」は12.4%と、自宅のパソコンよりもケータイを利用している。世代別にみると、20代は69.4%が最も多く、年齢があがるにつれてケータイよりも自宅のパソコンが増える。60代では、ケータイ29.3%に対し、自宅のパソコンは56.1%となっている。

育児や家事などで多忙な彼女たちがじっとパソコンに向かうのは、たやすいことではない。それに比べて、ケータイには常に電源が入っており、なかでもメール機能は短時間で作業を終わらせることができる。彼女たちの日常的な情報交換や気軽な近況報告には、ケータイのメール機能が適しているのである。

(2) ネットワークづくり

①現在のネットワークをつくる

彼女たちがケータイの情報ネットワークを使って連絡を取り合う相手は、幼稚園の保護者などの子育て仲間である。

【2-1】幼稚園もやけど、小学校。名簿がもらえないし。そうなったときにやっぱ。この宿題どうやったん?とか、そういうのもメールで聞いたりとか。明日の持ち物なに?とか。そういうので幼稚園とかに友だちがおらへん人はしんどいやろうなって思う。(D)

彼女たちが日頃どのようなやりとりをしているかは【2-1】からわかる。この他にも、子どもを公園に連れて行くときに誘うとか、スーパーの特売品を代わりに買っておくか尋ねるとか、日常生活のあらゆる場面で、子育て仲間と連絡をとりあっている。その内容は先ほども述べたとおり、緊急性や重要性に欠けたもの

が多い。

母親のケータイによる情報ネットワークに加わってなくても、子育てについての最低限度の情報は、幼稚園の配布物や自治体の広報などから得ることができる。しかし、「幼稚園とかに友だちがおらへん人はしんどい」という語りは、それだけでは充分でないことを表している。自分がインフォーマルなネットワークに入っていないことで、子どもの生活に影響を与えるのではないかという不安を感じる母親もいる。

②過去のネットワークをつなぐ

ケータイを通じてのやりとりは、新たな子育て仲間の構築だけでなく、これまでのネットワークを継続させている。

筆者がおこなったアンケート調査では、約半数の母親たちに、学生時代からの友人とのつきあいがある。学生時代からケータイを使っている3人は、現在も学生時代の友人とケータイで、とりわけメール機能を使ってやりとりをしている。

【2-2】(以前活動していた子育てサークルのメンバーと)「みんなでお花見に行きましょう」って言って、メールでやりとりしたりとか。(B)

Bはすでに退会している子育てサークルのメンバーとも連絡を取り合っている。CやDは長子が小学校に進学した後も、幼稚園で知り合った母親たちとメールをしている。活動が終了したあとも関係を続ける手段として、ケータイのメール機能が活用されている。

子どもがきっかけで知り合った間柄でなくても、母親たちがこれまで所属していた集団(例えば学校や会社など)のメンバーとのやりとりも、メールが使われている。

【2-3】(学生時代からの友人と) メールとかでやりとりするのが一番多いです。西宮、大阪、いろんなこの友だちと、ほんと、時々、みんなちっちゃい子ができたりしてるんで、その子に関することが多いですかね。(B)

過去の人間関係を継続するのにケータイが一役買っている。とはいえ、学生時代とは違って通話機能を使うことは少なく、メールがほとんどである。話題の中心は子どもや子育てであり、自治体の制度や育児グッズなどを知るきっかけになっている。

(3) 関係性を深めるためのメディア

第1節で指摘したように、幼稚園などで学級名簿が配られなくなり、母親は自分の子どもが仲良くしている園児の母親と、自発的にケータイの番号を交換して、連絡をとりあっている。これは子育てサークルや

子どもの習い事で知り合う母親にも当てはまる。

母親たちは入園や進級によるクラス替えで4月に新たな保護者と知り合う。インタビューをした8月の時点で「お母さんたちのグループはもうできあがっている。」という。ケータイの番号やメールアドレスの交換は、子どもが幼稚園に慣れ始め、仲の良い友だちができる6月頃までに済まされるという。

ここで注意しなければいけないのが、子どもたちのネットワークに準じて母親たちのネットワークがつくられる点である。子ども同士の仲がいいだけで、決して母親同士が仲良くなっているとはいえない不安定な関係から、ケータイによるやりとりが始まる。

母親たちは、状況や内容によってメディアを選択する心遣いをみせながら、他愛もないやりとりを繰り返すことで、安定した関係を構築していく。

第4章 育児をする主婦にとってのケータイ

主婦の育児の特徴のひとつに、家庭の外からの直接的援助を受ける機会が非常に少ないことがある。しかし、このことは母子が孤立していることと同義ではない。なぜなら、母親たちは自主的にネットワークをつくり、情報交換という間接的援助をおこなっているからだ。その情報ネットワークを支えている道具のひとつが、ケータイなのである。

子どもや地域についての情報交換は、ケータイが現れる以前からおこなわれていた。例えば井戸端会議のようなやりとりである。近所の女性たちが家事の合間を縫って集まり、世間話やうわさ話をしていたように、現代の母親たちはケータイを活用して井戸端会議をおこなっている。しかもメール機能という、相手の生活を邪魔しない配慮を見せながら、他愛もないやりとりを繰り返す、親密な関係を築いている。

子育て仲間の情報ネットワークともいえる関係性から外れることは、自分だけでなく、子どもの生活にも影響を与えかねない、そんな不安を抱く母親もいる。

実は、当初は育児の実態や子育て支援の利用についてのインタビュー調査であったため、筆者は、質問内容に携帯電話についての項目を設定していなかった。

ところが、インタビューをしている最中、テーブルの上にはケータイが置いてあり、4人のケータイにはメールが届いていた。メールの受信によってインタビューが中断され、「幼稚園のお母さんからなんです。バザーの連絡があつて。(D)」とか「主人からです。今日、インタビューを受けると言っていたので、気にし

て。(A)」など、彼女たちは「すみません」という言葉とともに、メールの送信者について教えてくれた。また調査に協力してくれる人を紹介してほしいと頼むと、ケータイのメモリーを見ながら目ぼしい人を見つけ出し、その場で交渉してくれた。このような成り行きから、彼女たちの情報のネットワークをつなぐツールとしての、ケータイの存在を無視することはできなくなった。

育児ネットワークの構築にケータイがどのように活用されているかを見てきた。最後に、育児期の主婦ならではの特徴として、2点を指摘したい。

1つは、「個(人専有の)メディア」としてのケータイである。

家族のメディアとしてではなく、個人の持ち物としてのメディアとして機能している。彼女たちがこれまでに築いてきたネットワークの継続や育児ネットワークの構築などに「個メディア」としての機能が反映している。育児期の主婦にケータイを持つ理由を問うても、明確な回答は期待できないだろう。なぜなら、彼女たちは結婚や出産などの前から自分のケータイを持っている世代だからである。しかしその用途は明らかに変わってきている。

もう1つの特徴は、「子(育て情報)メディア」としてのケータイである。

彼女たちのケータイで交わされる情報には、子どもにまつわるものが目立っている。家庭や家族全般についての情報が交わされるのは、自宅の固定電話である。彼女たちのケータイは、あくまで非常に個人的な持ち物で、番号を知らせている相手は限られている。その相手は子どもを介したネットワークに偏っている。

以前なら、たとえ最終的には母親が請け負っていたにせよ、子どもに関係するやりとりは、自宅の固定電話で交わされていた。ところが、母親のケータイで交わされることで、そのやりとりを母親以外の家族が知ることなく済まされてしまう可能性を含んでいるのである。

ケータイの「子メディア」としての機能は、育児が生活の中心にある乳幼児の母親に特有のものである。彼女たちは結婚し、母親になることで「個メディア」に「子メディア」の要素を加えた。

子どもの生活環境を整えるために、そして、母親自身が子育てしやすい環境を整えるために、乳幼児を育てる母親のケータイは「子メディア」化している。「子メディア」としてのケータイを活用してできた情

報ネットワークは、母親を間接的に援助する育児ネットワークとして成立しているのである。

注

- 1) 筆者自身はなるべく「ケータイ」を用いることにする。
- 2) 本論文は平成19年3月に博士(社会学)の学位取得が認められたものである。
- 3) 調査対象者は兵庫県K市の私立K幼稚園の園児の母親180名。幼稚園の父母の会の総会2006年4月26日に配布し、同年5月2日に園を通じて回収した。180票配布し、回収票数は127票(有効回収率70.5%)であった。うち専業主婦(78.6%)、および内職(4.7%)、パートタイム(6.3%)を含む113票を分析の対象とした。
- 4) 上記のアンケート調査において、了解を得られた4人を対象にインタビュー調査をおこなった。調査時期は、2006年8月下旬から9月上旬である。インタビューは調査者の自宅あるいは自宅近くのファミリーレストランにおいて、筆者と調査対象者だけでおこなった。インタビューの際には、調査対象者が語った内容をメモに記録し、調査対象者の承諾を得た上で、会話をボイスレコーダーに録音し、逐語文字化した。
- 5) 夫が日常的におこなっていることは、「子どもの遊び相手をする」72.6%や「子どもを風呂に入れる」64.6%、「寝かしつける」40.7%、「排泄の世話」38.1%、「着替えの手伝い」25.7%、「食事の世話」21.2%、「幼稚園への送迎」12.4%の順である。夫は家事と重ならない周辺部分を担っている。
- 6) 90.3%が核家族、父方親族との同居は7.0%、母方親族との同居は2.7%。
- 7) 母方祖父母が日常的におこなっているのは、「遊び相手」23.0%、「食事の世話」6.2%、「着替えの手伝い」2.7%、「入浴の世話」2.7%、「排泄の世話」2.7%、「幼稚園への送迎」2.7%、「寝かしつける」1.8%の順である。父方祖父母も「遊び相手」20.4%、「幼稚園への送迎」5.3%、「食事の世話」4.4%、「入浴の世話」4.4%、「排泄の世話」4.4%、「着替えの手伝い」2.7%、「寝かしつける」0.9%の順である。
- 8) 母親が育児について相談するのは、父親70.8%、母方祖父母51.3%、子どもを通じて知り合った人49.6%、その他の友人33.6%、近所の人30.1%、その他の親族23.9%、父方祖父母14.1%、幼稚園の先生9.7%の順である。(複数回答可)
- 9) 母親が育児についての情報を得ているのは、子どもを通じて知り合った人69.0%、近所の人41.6%、その他の友人35.4%、その他の親族20.4%、母方祖父母18.6%、幼稚園の先生14.1%、父親10.6%、父方祖父母9.7%の順である。(複数回答可)
- 10) 母親が日頃からつきあいがある人たちは、幼稚園児の保護者76.1%、近所の人70.8%、学生時代からの友人54.0%、子育てサークル18.6%、職場(元職場)15.9%、産院で知り合った人11.5%、その他の人3.5%の順

である。(複数回答可)

- 11) アンケート調査では、育児について「同世代との協力が必要」89.2%や「高齢者との協力が必要」80.2%に対して、「若い世代との協力が必要」61.3%と大きく下回った。インタビュー調査でも、「今のうちの(子ども)担任はまだ若いし、結婚してないし。子どもがいないから、相談ができない。わからへんやろうから、訊いても。」という語りがあった。
- 12) 東京30キロ圏に住む満20歳から59歳までの何らかの賃金労働に従事する男女400名を対象に、2000年1月下旬に自記式質問紙留置式でおこなわれた。うち携帯電話利用者260人を分析の対象としている。
- 13) 森永乳業株式会社の「エンゼル110番」に電話をかけてきた子育て中の母親100人を対象とする、電話による聞き取り調査。調査期間は2005年12月15日から2006年2月3日まで。母親の年齢は、20代が45人、30代が54人、40代が1人。子どもの年齢は、6ヶ月未満が40人、1歳未満が37人、1~2歳代が22人、3歳以上が1人。子どもの性別は、男子48人、女子52人。居住地は、首都圏66人、首都圏以外33人、不明1人。
- 14) 調査者はサンケイリビング新聞社。調査対象者は全国の20代から60代の既婚女性1232人、調査期間2007年3月5日、調査方法はリビング新聞のウェブサイトで

「えるこみ」にアンケートを提出。

参考文献

- 奥野卓司, 2000, 『第三の社会』岩波書店
- 是永 論, 2006, 「携帯メール『親しさ』にかかわるメディア」山崎敬一編『モバイルコミュニケーションー携帯電話の会話分析』大修館書店
- サンケイリビング新聞社, 2007, 主婦(2007年/全国)「ケータイ・PCメールの利用」アンケートサマリー
- 富田英典・南田勝也・辻泉編, 2007, 『デジタルメディア・トレーニング 情報化時代の社会学的思考法』有斐閣選書
- 松田美佐, 2001, 「パーソナルフォン・モバイルフォン・プライベートフォンライフステージによる携帯電話利用の差異」川浦康至・松田美佐編『現代のエスプリ 携帯電話と社会生活』至文堂
- 松田美佐, 2002, 「ケータイ利用から見えるジェンダー」岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門 メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』有斐閣選書
- 森永乳業株式会社「エンゼル110番レポート vol. 48 子育てママの携帯電話活用法ー100人のママに聞きました」2006年10月14日
- https://www.dsn.co.jp/press/pdf/060508_report_angel_110.pdf